

ペスタロッチ『読書ノート』の構造と思想

— その社会批判，人間学構想および教育思想 —

宮 崎 俊 明

Ein Beitrag zu Pestalozzis „Bemerkungen zu gelesenen Büchern“

— eine Analyse ihrer Struktur, und seine Gesellschaftskritik,
anthropologischer Entwurf und Erziehungsgedanken —

Toshiaki MIYAZAKI

I. 問題の所在と成立事情

「私は13年間一冊の本も読まなかった」(8・243)¹⁾。「この30年間書物など読まぬし読めもしなかった」(13・196)。前者は1782年8月15日『スイス週報』での、後者は1800年末執筆の『ゲルトルート』での証言だが、そのとおりとすれば、ペスタロッチは1770年25歳から55歳まで、鋏をもらった10年間とその後それをペンにもちかえた約20年間、読書しなかったことになる。従来そこに彼の実践への没頭、時代の知的世界や教育論との没交渉ないしそれらへの批判意識の潜在、わけても教育的天才の面目などが指摘されてきた。しかし、『リーンハルト』の執筆に J. Marmontel の刺戟を語る後年の、それと抵触する自己記述があり(28・237)、とくに批判版にシェーネバウムが手稿(MS)を校訂収録して命名した『読書ノート』(Bemerkungen zu gelesenen Büchern)²⁾という厳然たる反証もある。

従来のペスタロッチ研究では、この『ノート』は正規の公刊物たる著作のみならず、書簡集、生前未発表の著述、未定稿、断片等に比し資料価値の低いものないし処理困難なものとして十分に注意されてこなかった。なによりテキストとしても1899年 J. Zehnder が手稿を整理したものをザイファルトがその第2版にわずか5頁分を収録したにすぎず³⁾、このことはイスラエルのビブリオグラフィでも記述されているが、その後の W. Klinke および J.-G. u. L. Klinkによる二種の文献目録では、この『ノート』を標題化したモノグラフィーはみあたらない。批判版収録の翌年、1931年に編者シェーネバウムがその伝記4部作の第2巻に主たる書名論文名を一覧に供したのが最初の報告であり⁴⁾、文献研究を進めたオッターは『自然と社会の状態 断片』の成立にかんがみ一言言及したにすぎぬ⁵⁾。ただ、2次大戦後、文献的吟味からではないが、論者の主題と視角からこの『ノート』に触れたものはある。たとえば、フィッシャー＝ツェストは自由概念の検討にさいし、『ノート』中のセレの自由-必然論に關説した部分のみをとりあげ、ペスタロッチがカント、フィヒテら

の影響下に入らず「独自の道」から出発したとする典拠とした⁶⁾。また、フィンランドのトイヴィオは「ペスタロッチの『生の危機』と人間観」で、1780年代はドイツ圏より英仏圏の、しかも講壇的でなく通俗的潮流の影響の大きさをこの『ノート』とシュテートバッハーの先行研究に依拠して論じたが、⁷⁾ 事実関係への類推の域を出ぬ言及があり、政治社会問題への批判的志向は汲み上げずにおわった。こうしたなかでペスタロッチの教育思想の経験的基盤を踏査したビルクの学位論文は、『ノート』前篇のみを扱う限界はあるが、18世紀啓蒙主義的人間学に生理-心理的と歴史的の両視座のうち、後者を民俗的-社会的接近としてヘルダーなどの影響を認めながら、ペスタロッチが異文明にルソー的自然状態をみ、古代社会に当代の教育と政治の限界をみたとし、「下からの歴史的人間知」の「経験」を入手したと説いて、この『ノート』を『嬰兒殺し』から『リーन्हルト』第2版への過渡的契機として位置づけた⁸⁾。

なお、近年ではランクの論争的著作を看過してはならぬが、社会契約論へのペスタロッチの敵対意識と、啓光団(Illuminatenorden)運動への参画による職業教育への関心との二点でこの『ノート』に触れるにとどまっている⁹⁾。ランクは『リーन्हルト』を「封建的ユートピア」¹⁰⁾とし、80年代のK.v. ZinzendorfやP. Fellenbergらへの傾斜もラバターらの道徳的神秘主義と絶縁せぬままの延長とみなし、その後の『探究』の社会哲学も『ゲルトルート』の教育論も90年代における内外の政治状況の変化からする思想的知的試練の検証をつくさぬままで、いわば政治から教育へ敗走したのだと解した。その上、ペスタロッチの教育的世界の構築は、『夕暮』の家父長の世界と『自由論』の共和的世界との二律背反的輻輳状況を選択ないし止揚できぬままの「再建」にすぎず、その思想全体が政治的なるものの非政治化の構図であり、極論すれば『政治的ペスタロッチ』とは擬似政治的ペスタロッチであるとみた。ランクのペスタロッチ理解のこの図式は、政治と教育、革命と反革命、個別的国民主義ないし地域主義と普遍的人文主義、政治的進歩主義ないし自然法理論と教育的保守主義ないし現実主義、発生的歴史的相対主義と道徳的自律の絶対主義、イデオロギーとユートピアといった対立や矛盾、「破れ目」が状況的事実の媒介でいかに機能するかにあった。その場合、彼の方法はイデオロギー解釈に通有の実践的評価の態度で思想形成の歴史社会的連関を抽出した。その限りでペスタロッチのいわば「非神話化」を遂行したのは功とすべきだが、次の点で問題をはらんでいた。第一に、社会的行為の場面で主観的意図と客観的機能とがいかに媒介されながら政治的有効性をもちえたかの分析に、ペスタロッチの自己理解を基底とした全体構造の枠組みが不十分だった。第二に、政治志向が革命的か反革命的かの論及に解釈モデルとして契約理論、法概念、抵抗問題、国民主権等のカテゴリーを用いて反革命性ないしそのアンビヴァレンツを指摘するが、この主張はシュテフナー運動などへの参加の事実と不整合をきたし、かつ政治行動への宗教的動機や道徳的次元ないし世界市民的位層の思想的事実を捨象ないし隠蔽せざるをえなかった。第三には、以上の二点と関連するが、ペスタロッチの教育性の吟味にさいし、政治的関与での挫折の結果とする論断とそれをもってする生一般の理解とで表面的にし、教育行為の内在的理解は当初から放棄して、教育の政治への従属ないし還元を進め、それ自体ひとつのイデオロギーと化したのである¹¹⁾。

ともかく、かかるランクの論断は外在的図式的説明であり、加うるに文献踏査の不足が重なって悪循環を呈しているといわねばならない。本稿の主題のひとつもこの点の吟味と批判にある。

さて、ペスタロッチには、1790年代は、国内外の客観状勢とそれへのアンガージュ、哲学的論著の仕上げと教育実践への開始などで重要な時期だったが、『夕暮』および『リーन्हルト』から『探究』への短絡は、それらと平行ないし背後にあった未定稿や断片の主題への顧慮を浅くし理解を単純化する危険があろう。ペスタロッチの著述活動は、『ノート』開始以前の約10年間でほぼ次のような経過をたどったからである。1777年秋に『リーन्हルト』の基本主題を設定し、翌年夏から執筆しながら計画は冬に人に示した(1・179 f., B. 516 ff.)。一方、79年5月には『自由論』の第1回目の草稿を仕上げ(B. 520)、1ヶ月後に「ほとんど全面改稿を余儀なくされ」(B. 521)、8月に完成したが、検閲体制への危惧から公表を9月に断念(B. 523 f.)、それと平行して執筆していた『夕暮』は、その草稿が6月30日になされ(1・360)、3度の改筆をしながら9月下旬から12月末段階で成稿とし、『自由論』に代って公表した(B. 521, 523 f.)。また、同じ頃、11月の募集締切りにむけ『消費論』を草した(B. 532)。さらに、80年に執筆し83年5月に序文を識してドイツで出版した『嬰兒殺し』(9・1, 3)は、その間のペスタロッチ自身の証言でも、81年初頭なお資料収集をし、1月中旬に結論部分に入り(B. 541)、2月下旬に I. Iselin に原稿を送りながら再度推敲、7月と8月との間に資料増加に伴う整理をしていた(B. 551, 554)。『リーन्हルト』初版第1巻は、80年の春先にほぼ仕上げていたが(B. 527, cf. R. 10・518; 2・187 f., 191)、改稿を6月から9月にし、清書して10月20日にイーゼリンに送った時点で完全に脱稿した(B. 528, B. 3, S. 455)。81年4月に第2巻試作を仕上げたが(B. 545)、この年には『居間の児童論』をものしながら刊行は断念、82年は年頭から1年間『スイス週報』を発行しつつ秋には『クリストフとエルゼ』を完成した。83年6月には第3巻に着手、翌年1月に完了した(B. 581, 592)。この巻の序文に「85年3月10日」(3・3)と識すごとく、原稿が1年間寝かされている間は婚姻法改正や経済上の時論に着手した。この第3巻の最終文章は続刊を予告していたが(3・236)、85年12月では完成しておらず(B. 648)、執筆は86年に集中し、上梓は87年の春となった。

上記の論著の公開には検閲当局への警戒を要し、執筆は編集責任者、出版者、審査員等の方針や評価に沿う必要もあり、加えて、自身の内的抵抗もあって、陽の目をみなかった論説もある。そして、かかる不首尾の背後でペスタロッチは人間と社会との問題にとり組もうとし、その思考過程を『読書ノート』に吐き出したのである。また、時期がこれには若干先行するが、主題上重複する次のメモや断片類がしたためられていた。『『犯罪および刑罰論』メモ』は、ベルン経済協会の懸賞論文とタイトルを同じくし、会計簿に夫人アンナが清書したものだが、時期は『スイス週報』5月23、30日両号の「アーナーの勧告」との関連からしても82年であり(cf. 9・539 f.)、その点で『嬰兒殺し』の執筆と出版との間にあった。また、これとほぼ重なる『所有と犯罪論メモ』では、冒頭「本書の基調は想像図とひからびた哲学との中間にある」(9・195)としながら、『リーन्हルト』初巻と時代の思潮とをさして、前者の発展と後者の批判をめざした。しかも、これは表現様式で『嬰兒殺し』に類する部分

も含み(9・195, 198), 81年に加入し87年に退会するスイス啓光団のリーダー J. Mieg に送ったものである(B.3 S. 473)¹²⁾。さらに『自然と社会の状態 断片』は上の二篇と主題上の関連が高く, その末尾に明記しているごとく(9・237), 『読書ノート』前篇7章32節のシュックマンの影響下にあるとみてよく, その所収誌 *Berlinische Monatsschrift* 1783年5月号からしてその後の執筆になり, 6月6日 K.ツィンツェンドルフ宛書簡での言及も傍証となろう(B. 581)。ただ, この手稿は12月末に断念され, 後半部分を欠く(9・542)。他にも, 手稿の記法や用紙等の考証から推して『ノート』前篇の直後の86年後半から翌年当初とされる『人倫概念の成立』があり(9・576), この予備作業として85年末からしたためられた『地方習俗の価値』と『都市と山間の社会性』とがある。後二者は当初78/79年と推定され批判版第1巻に収録されたが, そこでの鍵概念である *Conformitet* や関説する人名からして『ノート』前篇作成期前後の85/87年に移された(9・Ⅶ)。ただ, 従来, 『人倫概念の成立』と『探究』が重視され, そこでの哲学的道徳的概念の類似を強調するに急で, しかもそれを二著にとどめるのみで, その線上の思考過程の吟味が不十分であった結果, たとえば80年代を通じ最大の課題だった『リーन्हルト』での社会像とその道徳の民俗的次元との統一的把握に粗漏をきたすきらいなしとしなかった。極論すれば, 哲学的論著から本質を, 文学的作品から心情を摘出して思想を抽象的に構成しがちだった。また, 『リーन्हルト』を作者の心情の形象や封建的ユートピアの構想とみるのは, 上述の一連の執筆過程の重層性やこの作品全4巻の成立と展開を注視すれば, 若干の無理もあった。諸断片と『読書ノート』との差は記述レベルのものであって, 内容構造の理解ではひとつに組み込むべきである。

さて, 『読書ノート』には作品としての統一性や完成度はなきに等しいが, ペスタロッチの想念が赤裸々奔放に発揮され, 思考と執筆の原初的レベルが吐露されている。文献の引用個所等に関説して自らの見解を表明し, ときに原文の形式を踏襲しながら別内容を投入する面もみせる。そこには思想の産出契機や形成過程, 執筆方法, 受容方式や影響関係を把えるユニークな資料的価値があるといつてよい。本稿では『ノート』それ自体の主題を再構成しながら, そこでの問題意識ないし思考の視点や過程をあとづけたい。そのさい, 『ノート』の上述の特徴とその時期や位置からして, 彼の社会批判と参画した運動組織や時代思潮への対応方向の発掘をめざす。また, この『ノート』を後続する『探究』での社会的人間論への序段とみなしながら, 彼の人間学の粗描を摘出したい。さらに, 参照文献から入手した事実内容や発想形式の発掘も試みたい。

『ノート』前篇は85年後半から86年春の作業だが, その数年前からペスタロッチにはその交流圏の刺戟や著述過程からして, 読書や文献閲読への関心がめばえていた。たとえば, 20歳の青年家庭教師 P. Petersen に宛てた10余通の書信のひとつ82年5月のもので *Straßburger Anzeiger* や *Courier de l'Europe* を告げたし(B.564), その年の春, ミークには, 前年にイーゼリンが『リーन्हルト』第1巻にした批評に対応するかのごとく(B. 545), 国家論や経済関係の書物はほとんど読んでこなかったと反省的に述懐した(B. 570)。わけても83年後半には『ノート』に重要な位置を占める *Berlinische*

Monatsschrift 5月号が「読むべき本」として自覚された(9・237)。そして、このミークとフェルレンベルクとの仲介で、ヘルンフト教団の創設者 N. v. Zinzendorf の甥にあたり、行政家にしてルソーやヴォルテールと交流するとともに Ephemeriden 誌の同人だったツィンツェンドルフへの85年12月の書簡では、自ら「最重要書簡」という79年6月のものや(B. 521)、世界観を告白する93年10月の G. Nicolovius 宛書簡(P. 712)に比し遜色のない、次の重要事項を記した。すなわち、『リーンハルト』既刊3巻の反響の少なさへの反省や農場閉鎖後離れていた実践への熱望を表明したあと、自身の研究課題とその方法について、「自然(本性)の固有の根本衝動と、人類が今日まで様々な状態で幸福や不幸になってきた一切の歴史と経験との探究による、真の人間指導の一般理論 (allgemeine Theorie der echten Menschenführung) が目下の計画である」(B. 648)、としたためた。『ノート』前篇はこの書簡をはさむ前後3,4ヶ月の作業だった。なお、これに対応して2年後、87年春 F. Münter に宛てて、「目下、人間とその指導一般の究極目的のための計画や資料収集およびその読破をし、年がいもなく新しい歩みを始めた」(B. 666)、と書き送っている。

したがって、86年に執筆が集中する『リーンハルト』終巻と既刊3巻との断絶、傍らでのメモ風の諸断片の執筆や書簡などにかんがみ、この前年にペスタロッチの執筆と思考の方法には変動があったといえよう。彼の参加した団体結社やその関係者と刊行物もそれを促したひとつだった。当時、彼の周辺には10余の組織がみられ、H. Hirzel の道徳協会 (Moralische Gesellschaft)、ラバター、J. Breitinger らの禁欲協会 (Asketische Gesellschaft)、数学-軍事協会 (Mathematisch-militärische Gesellschaft) 等があったが¹³⁾、70年代末のペスタロッチは経済的・政治的傾向の強いヘルヴェチア協会 (Helvetische Gesellschaft)、文化的・道徳的志向をもつバーゼルの善行社会福祉奨励協会、さらに農業部門をもつ自然研究協会 (Naturforschende Gesellschaft) に関与した。80年代に入って、沿革、規模、影響力の点ではるかに大きくかつ秘教的傾向も強くしたフリーメイソンと啓光団のうち、前者のより強い影響下で統合を志向してできたチューリヒの善行増進一般協会 (Allgemeine Gesellschaft zur Aufnahme des Guten) に加入し、これが86年に改組名称変更された倫理的・家庭的幸福振興一般協会 (Allgemeine Gesellschaft zur Beförderung sittlicher und hauslicher Glückseligkeit) と先のバーゼルの協会とが統合されたものにも所属した。この会は民衆の啓蒙教化、手工労働の推進、教育の計画と維持、貧困家庭への経済援助を目標にしていた(B. 586, 651; B. 3, S. 477 ff.)¹⁴⁾。主導者のラーン、ミークラとともに彼も、それぞれ Mignard, Epictet, Alfred といった仮名を用い交信したが(B. 586)、『リーンハルト』終巻で「世界は愚者の家だ」(3・323, 451, 468) とするシニシズムの持主ヘリドールのモデルとされるミークには当初は接近し後に離反していった(B. 3, S. 472 ff.)。ミークが主導する啓光団の秘教的高踏性や現世蔑視的傾向からする世俗への参加をペスタロッチは危惧し、関与すべき実践の方向と思想の選択の前で葛藤していた。図書の入経路に関しては、たとえば、83年に「パンのために自分をももの書きに変え…ただの物知り」に後退した¹⁵⁾、とまでされて、激怒し抗議状を出した相手 H. Schinz が、ツィンフト・ハウス内の自然研究協会の図書管理者だったが、ペスタロッチは、そこで図書を借用し、85年4月には礼状を出して

